

小川そだち × 小川ぐらし

住み継ぐ×住み

住み継ぐスタイル

「移住」というとたいていの場合、
移り住む人に焦点が当てられがちですが、
小川町は受け入れる側、つまり、
この土地で育った人の想いも大切にしています。

「住んでいる人」と「住みたい人」が顔を合わせ、
理解しあい、信頼で結ばれていくことが、
私たちの目指す幸せな移住の形であり、
これからの町づくりにとって
大切だと考えるからです。

手漉き和紙や酒造のふるさとであり、
有機農業の草分けの地でもある小川町。
ここはかつて鎌倉と上州を結ぶ
街道の要所として栄えました。

大勢の人びとが行き交い、
発展してきたこの町には、
互いの「個性」を尊重しつつ、
「多様性」を認め合い、
ゆるやかなコミュニティを形成する
包容力があるのです。

この冊子では、
そんな小川の家をふるさととして育った人と、
その家を未来のふるさとにしていく
7組の家族たちの姿を取材しています。

「小川そだち」と「小川ぐらし」が出会い、
まちの記憶を受け継ぎながら暮らしていくことを、
私たちは「住み継ぐスタイル」と名づけました。

この言葉、この想い、このスタイルが
スタンダードなものとなったとき、
地方と都市の垣根を超えた〝新しい暮らし方〟が
生まれてくるものと信じています。

築145年の佇まいに一目惚れ

山下嘉彦さん・由美子さん◆有機野菜食堂「わらしべ」

「即決でした」。山下夫妻は13年前、一目でこの古い商家の重厚な佇まいに惚れ込んだ。「予約なしでふらっと立ち寄れる、みんなの日常のなかにあるお店」を思い描いていた夫妻にとって、これ以上ぴったりくる物件はなかった。一般住宅に改装予定だったがらんどうの家をそのまま借り受け、内装はDIYし、有機野菜食堂「わらしべ」をオープンさせた。

堂々とした漆黒の梁、木格子から差し込む朝の柔らかな光に「ほっとする」と由美子さん。築145年を誇る家屋は、古木のようにずっと町を見続けてきた。使い込まれた飴色の柱やキズも、先人たちの人生を支えた証だ。

小川の夏は酷暑だが、クーラーは使わず、扇風機で乗り切る。嘉彦さんが「昔の家は夏の気候を意識して造られた」と話す通り、風が南から北に抜けやすく、わりと涼しい。真夏、扉を開けた客は「あれ、ひんやりするねー」と感想をもらす。

古い家屋だが、「気にかけていることは何もない」と夫妻は口を揃える。住むほどにしっかり建てられた家屋への信頼は増すという。「かえって古い柱の方が頑丈で、私たちが足した柱に虫がついたりして」と、由美子さんは笑う。

北側にささやかなブドウ棚がある。13年の月日は、嘉彦さんがホームセンターで購入し、自転車で連れてきたベリーAの苗を大きく成長させた。収穫した実は、夏のカキ氷シロップや、自家製パンの酵母となって、メニューに登場している。

夫妻に休日によく出かけるスポットを尋ねてみると、町の中央を流れる清流「槻川」という答えが返ってきた。春は嵐山渓谷下流の桜堤からの花見を楽しんだり、よもぎの季節になればよもぎ摘みをしたり、秋には80メートルにも渡って咲く彼岸花を眺めたりと、この土地らしい四季折々の自然の変化を肌で感じることができるのが、その理由だ。

夫婦の趣味は自転車での遠出。この商家は、以前時計店で、その前は自転車店だったというから、二人がこの店舗に導かれたのは必然、だったのかもしれない。



※有機野菜食堂わらしべ…小川町産の有機野菜を使った食事や自家製酵母パン、小川の地ビール、自然派ワインがいただけるカフェ。

町外の方々に気づかされる良さ

笠間洋右さん・俊宏さん◆カサマ・エステート

〝わらしべ〟が入居している物件は、間口が狭く、奥行きが深い、のっぽな区画だ。両隣の家屋との間は、猫の小径ほどの隙間しかない。中山道の側道に当たる旧街道沿いに、屋を組むように店が軒を並べていた様子から、和紙の町・小川のかつての繁栄ぶりが想像できる。

大家であるカサマ・エステート先代の笠間洋右さんは、昭和17年に小川で生まれ育った。当時、旧街道にあった店を事細かに記憶している。わらしべが坂本時計店だった当時、通りには鮮魚店、洋品店、今では関東一円に拡大したスーパーマーケット・ヤオコー本店など、専門店がひしめいていた。警察や郵便局といった町の機能も、周辺に集まっていたという。

ヤオコー会長の川野幸夫さんは同級生だ。同世代には会社経営者が多く、洋右さんも、不動産業の傍ら自動車整備販売業を起業したこともある。笠間家は、現代表の長男の俊宏さんで12代目となる名家で、洋右さん自身も、築80年近い由緒ある和建築に住む。

カサマ・エステートの扱う物件は、秩父事件の刃痕を残していたわらしべのような古い家屋から、最新工法の洋風マンションまで幅広い。時代の変化を見据えつつ、「どうしたら物件に霊祭が生まれるかをいつも考えている」と洋右さんは言う。

坂本時計店が、時代の趨勢で店をたたみ、返された時は驚いたという。後に、その空き家を山下夫妻が見つけることになる。俊宏さんは「仲睦まじい夫妻に丁寧に使っていただけて本当に良かった」と、偶然の引き合わせに安堵している様子だ。

小川を知り尽くしているからこそ、洋右さんはつい辛口にもなるが、心中で町再興を強く願っていることが伝わる。俊宏さんは、そんな父親の胸の内に寄り添いつつ、こんな希望を口にした。

「かえって町外の人の方が、小川の良いところをよく知っていらっしゃる。灯台下暗しですよね。おいしい空気と水、私たちはそれが当たり前の環境で育っていますから。町外の方々に気づかされる良さはあります」。



交わることのなかった人と人を結ぶ家

柳敏郎さん◆小川不動産



柳さんは、本町二丁目交差点に店舗を構える小川不動産の2代目だ。父親は60年ほど前に不動産業を始め、柳さんは20代前半で父の仕事を手伝い始めた。事務所の前には、小川町の道路の基点であったことを示す道路元標の石碑も建っている。親子で町の変遷を長く見つめてきた。

赤堀夫妻に貸した物件は、30年ほど前に小川不動産が建売した家だ。交通量の多い中心街より、郊外での子育てを望んだ柳さんが自ら入居し、家族と30年近い月日を過ごした。

花好きの柳さんが手塩にかけた庭木が見事だ。淡いピンクの花を咲かせるヤマザクラは、木部の両親宅から移植した。門かぶりの松は、川島町の用水路にせり出していたもので、植木屋を介して買ったものだ。庭で春は花見、夏は冷やしそうめんにホタル、秋は露天風呂、冬はお手製の囲炉裏で飲む一杯を楽しんだ。

今では、赤堀家からほど近い実家に住まいを戻した柳さんは、原川の家の処遇を気にかけていたので、若い一家がここを住まいに選んでくれたことが本当にうれしいのだ。「庭の木はいらなかったら、バキバキ伐っていいからね！」。柳さんは2人が庭の管理を負担に感じないように、明るい口調で気を配る。

香弥さんは、柳さんが庭に込めた愛情をくみとっている。5月に庭のサクランボが実ると、柳さんの分も収穫して届ける。「ありがたいことだよねぇ」。柳さんは恐縮する。実は赤堀夫妻も、庭はお気に入りだ。香弥さんは味噌作り教室をヤマザクラの開花時期に合わせて開くことにしたし、敬祐さんは初夏、風通しの良い2階から眺める青モミジが好きだ。

赤堀夫妻が小川へ移住してこなければ、おそらく互いの人生が交わることはなかった。家は、本当に不思議な箱だ。抱っこした赤ん坊を寝かしつけながら、香弥さんは柳さんの楽しい昔話に「へぇー」と耳を傾ける。穏やかな時が流れる。お互いのさりげない心配りが、この家で過ごした時間、そして、これから過ごす時間をゆるやかにつないでいく。

農家目線で見たら最高の物件だった

赤堀敬祐さん・香弥さん◆だいこんや農園



家屋がぼつん、ぼつんと建つ閑静な原川地区。2階のベランダに干しダイコンのカーテンが下がった一軒家から、赤堀夫妻はにこやかに姿を見せた。1階の窓越しにはベーっと舌を出しながら、取材陣を興味深げに眺める2歳半の太祐君がいる。

この家は実は世田谷から移住を決めた時に一度断った物件だった。香弥さんはその頃、まだ都内に通う会社員だったし、曇り空だったせいか、家も暗く見えた。「さすがにちょっと田舎過ぎるよね」。利便性を考えて、駅近くの平屋を選んだ。

敬祐さんが就農先に小川を選んだのは、香弥さんの母親が町内の有機野菜を宅配で購入していたことがきっかけだった。有機農業のパイオニアと言われる霜里農場の勉強会へ足を運び、落ち葉や生ごみ、家畜のふん尿などを無駄なく循環させる農業の在り方、生き方に深く感銘を受けた。

2人も、山に囲まれ、傾斜地も多い小川の地勢に自分たちの農業を合わせていく方法をとった。米に麦、大豆、野菜、果物を少しずつ作付けした。竹林の竹をチップにして畑に置き、薬を敷いた。小川の恵みを工夫して畑に還元した。現在、毎月80箱ほどの野菜ボックスを顧客に送っている。

農業に本腰を入れるようになると平屋は手狭になり、引っ越しを考えた。小川不動産からは、再び今の家を紹介された。原川の一軒家は、今度は2人の目にまるで違って映った。「静かだし、小屋もあるし、駐車スペースも十分。農家的には完璧じゃん！」。家選びの決め手は、もはや利便性ではなくなっていた。

資本主義は本当に人を幸せにするのだろうか――。敬祐さんは勤め仕事のストレスから抜け出したくて農の世界に飛び込んだ。食料を自給する暮らしは、お金を稼がないと生きていけないという都会の焦燥感を和らげる特効薬だった。皆の〝かかりつけ農家〟になりたい――。町医者を思わせるだいこんやのキャッチフレーズは、自らの体験がベースにある。

※だいこんや農園…農薬や肥料を使わずに育てた旬の露地野菜（年間70品目）、麦、大豆、米、果樹を栽培している。http://ogawadaikonya.com/

地主も発想の転換を

田中克彦さん・照子さん◆NPO 法人小川町創り文化プロジェクト代表理事

「この辺りは昔、花街でね、飲み屋街だった。夜はにぎやかだったよ。小林君に貸したこの家は、森田バーっていうバーだったし、隣もスナックだった」。克彦さんにそう言われて小林さん宅の周りを見渡すと、空き家の丸窓や格子窓、さびれた看板、表通りから隠れるようにうねった細道に、何となく当時の色っぽい町並みの面影が残る。

克彦さんは、小川を代表する地主のひとりだ。空き家が急増する現状を憂い、意気投合した仲間と2年前にNPO法人「小川町創り文化プロジェクト（まちぶん）」を立ち上げた。貸し主側が自らリーダーシップをとり、古い建物の調査や積極活用に動き出したことは、町にとっても、とても意義のあることだ。

夫妻を動かしたのは、明治築の自宅母屋と五軒長屋の改修作業を通して得た手応えだった。特に長屋は「きちんと人が住めるようにきれいにしたら、ものすごく反響があって驚きました」と照子さん。その風情ある佇まいに魅せられた入居希望者がひっきりなしに訪れた。埼玉県内の歴史的建造物に造詣が深い、元県立美術館主任学芸員の伊豆井秀一さんや、住宅ライターで今は五軒長屋でコミュニティスペース「たまりんど」を運営する平山友子さんなど、まちぶんの活動を支える同志との出会いにも恵まれた。

小川の空き家は800軒にも上る。照子さんは「夢を持った若い人たちが小川へ来た時、できるだけ良い条件で貸してあげたい」と話すが、代々家族が住んだ家を見ず知らずの人に貸すことをためらう地主もいる。小川の未来のためにも、移住者の志に心を開き、古い建物を有効活用してもらう方向に地主の発想転換を促したい、と克彦さんは考える。「まぁ、その風穴がなかなか開かねぇんだけどさ。少しずつやっていきたいね」、克彦さんは笑ってそう言った。

町が県の「歴史のみち景観モデル地区」に認定されたことを受け、2月、まちぶんは古い建物の活用を所有者たちに呼びかける記念イベントを開いた。風穴を開ける試みは続く。

表現の衝動を生む町

小林友宣（ゆうき）さん・村山日代妃（かよひ）さん◆フローリスト・庭師

この平屋の前の持ち主は3世代に渡って100年近く住んでいたそうだが、中に入るとそんな古さは感じない。基礎だけを残して改築、建て増しをしているので、内部は新築と見間違うほどにすがすがしい。クリエイティブな仕事に携わる夫妻にふさわしい、凛とした家だ。

小林さんは花が好きで、京都の大学時代から花屋で働き、研鑽を積んだ。今はさいたま市のベンチャー企業に勤め、切り花のオンライン事業を立ち上げる準備を進めている。パートナーの村山さんは庭師だ。大学卒業後、京都・高台寺庭園の修復や作庭も手がけた北山安夫さんに弟子入りした。独立してからは、料亭や個人宅の庭仕事を引き受けている。

京都で知り合った2人は、結婚を機に落ち着き先を探していた。村山さんの実家がある埼玉県の旧岡部町からほど近い川越、嵐山、高崎など、小川の他にも複数の都市を候補に挙げた。最終的に小川に決めたのは、大家である気さくな田中夫妻に出会って「町をすごく身近に感じたから」。小林さんが将来的に自分の店舗を持つとしても、交通の便が最も良いのが小川だった。

田中照子さんは2人の夢に耳を傾け、住事も気にかけてくれた。村山さんには自宅母屋の庭の修復を頼んだ。小林さんは店を1人で切り盛りしていた知り合いの花屋さんを紹介した。結局話はまとまらなかったが、照子さんが親身になって「一緒にやってみたら？」と持ちかけてくれたことで、人のつながりが仕事につながる感じが何となくつかめた、と小林さんは言う。

小川に知り合いが増えるにつれ、多芸多才な人が多いことに小林さんは驚いた。カフェをやりつつイベントを企画したり、有機農家をやりながらバーを始めたり――。

「ここではマイペースに自己表現していいんだよ、とすごく伝わってきた」。影響を受けた小林さんは、花屋への就職でなく、あえてベンチャーに飛び込む道を選んで、今に至る。「自分も何かやらなきゃ、という気になって」。小川はそんな衝動を生む町、なのだ。

思い出の詰まった家の再スタート

加藤久典さん

明治22年、町村制の公布によって誕生した小川の初代町長を祖父に持つ加藤久典さんは、小学生から大学を卒業するまでの間をこの家で過ごした。当時の町の様子を「それは華やかなものでした」と話す。きらびやかな神輿や山車で賑わう祇園祭のざわめき、和紙で彩られた七夕おとり。冬になると、和紙の原料である楮の皮むきを、お喋りしながらする女性たちの姿を槻川で見ることができた。「盆地にあり、水も美しい小川町は、小京都の名にふさわしい、風情のある風景でしたね」

家にもたくさんの思い出がある。広い庭で兄弟や近所の子供たちとキャッチボールやベーゴマ、メンコをして遊んだこと、家を吹き抜ける風の気持ち良さ。夏になると、ランドセルを家に放り投げて槻川へ泳ぎに出かけ、家の裏にある沢で沢ガニを捕まえた、時にはいたずらをして穀物蔵に閉じ込められたこともあった。

母親は14年前に亡くなるまでこの家に住んでいたが、加藤さん自身は就職を機に小川町を離れている。しかし、仲間とともにこの家を訪れては、広い母屋で酒を酌み交わしたことも数えきれない。たくさんの記憶が詰まった家を人のいないままにしていることを心のどこかで気にしつつも、すでに他の地に根を張った今から小川町に戻るのは難しかった。「記録によると、加藤家は元禄時代までさかのぼることができるんです。この家にも110年という歴史があるし、このまま朽ちさせてしまうのはやはり心残りでした」。移住サポートセンターから、「この家を借りたい人がいる」と連絡が入ったのは、そう考えていた頃だ。

家に求める条件が奇跡的に整ったという湯浅さんの申し出を断る理由はなかった。加藤さんは「思い出のある家を活用していただけるなら」と快諾。今も改修が進む家を訪れては、湯浅さんの「庭の梅がたくさんなりましたよ」といった報告に目を細める。新しい住人によって、再びこの家に思い出が紡がれていくことを、加藤さんもまた楽しみにしている。

暮らしながら育てていく終の棲み家

湯浅学さん◆音楽評論家

秩父の山並みを臨む小高い土地に建つ、小川町の初代町長を務めた加藤忠雄氏の元・住居。ここに2018年の春から住まいを移すのは、音楽評論家として多くの雑誌、書籍、イベントなどで活躍する湯浅学さんだ。30年近く前にニューヨークで有機野菜に出会い、自らも自然農を実践する湯浅さん夫妻は、2年ほど前から「畑のそばの家」を探していた。しかし一見積もりに来た引っ越し業者が〝うちでは無理です〟って名刺引っ込めて帰っちゃった（笑）」というほどのレコードや書籍を持っている湯浅さんにとって、広さも重要だった。また車を運転しない夫妻には駅から歩ける距離というのも外せない。

この条件に合う住まい探しは難航を極め、「小川にいい家がある」と聞いた時も、心のどこかで「きっと無理だろう」と思っていた。しかし実際見てみると、広さは充分で駅からは徒歩圏内。10分とかからない土地に畑もある。古く、手入れは必要ではあるものの、ほぼ理想通りだった。「よく考えたら、小川町には昔っから縁があったんだよね。有機農業に興味を持ち始めた頃に行ったセミナーで、有機農業のパイオニアである金子美登さんを知り、それ以降は種の交換会や、知り合いの農家の手伝いで肥料用の鶏糞を分けてもらうため、何度もこの地を訪れる機会があったのだ。一単純だからさ、縁があるって思ったら小川町への気持ちがバーッと盛り上がっちゃった」。

一足先に去年から畑でにんじんや小豆を育てているが「ほったらかし農法だけどしっかり育ってるよ。ミミズもいるし、やわらかくてすごくいい土なんだ」とうれしげだ。住居は今も改修中で「想像以上に大変！」と言うが、「自然農を共有できる場もあるし、蔵にオーディオを置けばいい音で聴く環境も作れる。改修はいつまでかかるかわからないけど、やることがいっぱいあってなかなか楽しいよ」と笑う。完成していく家ではないからこそ、住みながら育てていく楽しみが、ここにはあるのだ。

サポートを受け、心のつかえがとれた

根岸洋さん◆元高校教諭

暮らしに寄り添ったモノ作りを探る

藤野真也さん◆デザイナー（ランドスケープ×竹細工）

根岸さんは、17年前に熊谷高校で教員生活を終えた。2人の子どもも巣立ち、今は藤野さん宅裏の敷地にある母屋に一人で住む。角山は26戸が各地から集まって切り拓いた集落で、かつてはほとんどの家が養蚕、畑、和紙の三本柱で生計を立てていた。根岸さんが住む母屋も、2階で養蚕を営んだ面影がそのまま残り、築100年近い。根岸さんが子どもの頃は収穫期の秋になると、農繁休暇をもらって学校を休み、家の仕事を手伝うのが当たり前だったそうだ。

藤野さん一家が住む平屋は、根岸さんの両親が40年近く前にたばこ屋を始めるに当たって建てた。両親亡き後は妹さんが住んでいたが、その妹も他界。根岸さんが相続して空き家になっていた。手入れのされていなかった空き家の利活用を申し出たのが、古民家再生のボランティア活動に参加する毛利公昭さんだ。毛利さんの妹と根岸さんの姉がたまたま母屋北の敷地の取引にかかわったことがきっかけとなり、話が進んだ。根岸さんは空き家を毛利さんに託すことに決めた。「彼にまかせることにした。私も何もできないし、助かる」。

藤野さん宅の貸借には、建築事情に詳しい毛利さんが間に入っている。根岸さんが参考にしたのが、国交省が推奨する「DIY型賃貸借」だ。藤野さんにとっては、納得のいく形でDIY型リノベーションができれば、愛着を持って長く住み続けることにつながるし、根岸さんにとってみれば、新たな家族に住んでもらうことで家は傷みにくくなる上、きれいにしてもらえる。つまり、双方にメリットがある。

小川には、古い家の貸し借りの仲介を担える専門知識のあるボランティアがいることが心強い。家の片付けや維持管理が体力的に厳しいと感じていた根岸さんのような家主と、リフォームを希望する若い移住者との縁は、ボランティア仲介者のきめ細やかなサポートで円満に取り次がれた。根岸さんも、心の大きなつかえがとれた、と話す。

ガラガラと玄面の引き戸を開けると、真也さんのアトリエだ。平屋だが、中は開放感があり、広い。一昨年からの改装作業で天井材をはがし、高さを出した。「手をかけ過ぎず、抜き過ぎず、程良い加減を探りたい」という真也さんの思いが、爽やかな職空間に満ちている。あらわになった梁の上は、竹材の保管場所にした。蒼々とした竹が、頭上から藤野家の毎日を見守る。職場奥がすぐ家族の生活空間だ。4歳になる長女のひふみちゃんは家が広くなり、うれしそうに走り回っている。

真也さんは、都心の設計事務所で働いていた。専門は「ランドスケープデザイン」と呼ばれる分野だ。〝風景のデザイン〟とは？　真也さんによれば、「ゼロから建てるのでなく、既存のものを生かしながら、建築とその場所の風景を橋渡しするような仕事」だと言う。

そんな頭の働かせ方が、今の暮らし方、働き方につながっている。3・11を契機に暮らしを自活させたいと小川へ。母方の家系が代々小川の竹細工職人だったことに縁を感じ、竹を編んでみたら「手にしっくりとなじんだ」。地元の竹細工職人の指導も受けつつ、竹の加工技術に磨きをかけている。

収入源は今でも都内の設計事務所と共同で取り組むランドスケープの設計業だ。真也さんはそんなハイブリッドな働き方を前向きにとらえる。「パーマカルチャーとか、田舎暮らしの方向を無理に限定する必要はなくて、その中間もあると、僕は思う。小川の面白さは都会の感覚を持ちながら田舎暮らしができるところ」。

アトリエには凛とした造形の小作品もあれば、田んぼの除草に使う苗床いすや、昔の農家が使ったニワトリ入れなど大型の生活道具もあった。真也さんが目指すのは高尚な芸術域の竹工芸というより、農家の暮らしに寄り添っていた竹細工だ。そこに現代的なエッセンスを加え、モノ作りの裾野をしなやかに広げようとしている。



自由な暮らし方や楽しみ方を、ここで見つけてほしい

岩田みどりさん◆NPO法人たすけあいつばさ理事

「この家は、夫の大叔母とほぼ同じ年だそうです。生前娘の初節句の席で、〝建てた翌年に私は産まれたのよ〟って話していました」。お宮参りや初正月・初節句などの度に、大きな座卓を幾つも並べて親戚が一同に会していたという広い日本家屋は、築118年にもなるのだと、貸主の岩田みどりさんは話してくれた。

絹織物が盛んだった時代には機屋を営み、織り子さん達が住み込みで働いた。住居難だった高度経済成長期には2階を3つに仕切り数組の若夫婦に貸してもいた。この家で生まれ育った夫・康明さんによれば「新婚さん達に赤ちゃんが生まれると、父は毎日〝沐浴係〟を引き受けていました。恐い親父でしたが、なぜか乳児をあやして洗うのがすごく上手で。横須賀育ちでハイカラだったから、2階をダンス教室にしていたこともあったなあ」。

この家は、時代に合わせてさまざまな人の生活の入れ物となってきた。

「嫁いできたときはまだ、広い土間も、ガラガラ響く木の引き戸も現役。冬は寒かったけど、その古い風情が私は好きでした」。住まなくなってからも、岩田さんは家が傷まないように毎日風を通していた。「でも、人がいないと空気が動かないんですね。この広い空間を求めている人がいるのでは……思いは募り、移住サポートセンターを通して借主を探していただきました」。

壁の漆喰や、大きな梁を生かした改装を行い、現在ここは「やしきぼっこ」として老若男女が古民家の雰囲気を楽しめる場所となった。

「小川町は、山も畑も、自然も身近にありますから、自分らしい暮らし方を探せる場所じゃないかと思うんです」。小川には、まだまだたくさんの空き家も残されている。

やしきぼっこのように人が集まる場所にすることも、「広い家で子育てをしたい」「生きものや作物を育ててみたい」という思いも叶えることができるのでは、と岩田さんは言う。

「ここに住む人が自分なりの楽しみを見つけてくれるのは、私たちにとっても嬉しいことですから」。



人の魅力にほれ込んで、この場所を作った

高田信夫さん◆出版社高穂社代表取締役

都内で出版業を営む高田さんが小川を訪れるようになったのは、銀座の屋上で養蜂をする「銀座ミツバチプロジェクト」に参加したことがきっかけで、「ニホンミツバチを飼育する場所」を探し始めたからだという。都心からも、自宅がある大宮からも1時間と少し。有機農業が盛んで、自然も豊かな小川町のことを知り、通うようになった。

「環境がいいだけでなく、面白い人が多い場所だと思ったんです。カフェ兼ギャラリーの〝だまりんど〟に集う人たちや、里山の保全を目指す〝里山クラブ〟の人たち――そして移住サポートセンターを通じて岩田さんに家を見せていただいて、衝動的に借りてしまいました。話すとみんな来たがるものだから、後に引けなくなっちゃって（笑）」。

借りた家を、小川町に来てみたいと思う人や、小川町に住む面白い人々がつながる「ハブ」にしたいと考え、仲間の力を借りながらリノベーションを進めた。

まずは食にまつわるイベントをと考えていたため、セントラルキッチンはプロ仕様の本格的なもの。とはいえ、すべてが新品というわけではなく、閉店したレストランから机や椅子を譲り受けたり、不要な椅子や布団をもらったり、高田さんの人脈と工夫の賜物も随所に見られる。「自分たちで修繕できるところはして、抑えるところは抑えています」。

この家には「座敷ぼっこ（ざしきわらし）」が現れたことがある、という話から「やしきぼっこ」と名付けられたこのスペースでは料理教室、コンサート、映画上映、勉強会、ワークショップなど、多岐に渡るイベントを行ったり、「ぼっこ会」と呼ばれる町おこしセミナーを定例で開催したりと、オープンしてからの高田さんは目の回るような忙しい日々を過ごしている。

「人にどんどん声をかけちゃうものだから、ついやることが増えちゃう（笑）。ゆくゆくは宿泊もできるようにして農家民泊もできればと思ってます。最初の目的だったニホンミツバチの養蜂も始めたいしね」。

※コミュニティハウスやしきぼっこ…築約120年の古民家をリノベーションし、有機野菜を使った料理教室、ワークショップなど多様なイベントを不定期で開催。
詳しくはHPで確認を。https://kurabokko.wixsite.com/kominka

なるべくお金に頼らず、自分らしく

田中慎太郎さん◆農家のカフェ＆バー トランジット

農家のカフェ＆バー トランジット…オーガニックの地酒、地ビール、地ワインが楽しめるカフェ＆バー。移住者と地元の人々との交流の場にもなっている。
http://ogawa.transit.saitama.jp/

農業をしながら、自分のやりたいこともやって生計を立てる。そんな生き方を〝半農半X〟と呼ぶが、田中さんの仕事をそこに当てはめれば〝半農半店主〟だろうか。平日は有機農家として畑に向き合い、週末はカフェ＆バーのマスターとしてスマートな立ち振る舞いで客をもてなす。

二十歳の時にインドを訪れたことが、有機農法の盛んな小川への移住を考えるきっかけとなった。町内の農家で住み込み研修生として学び、就農。腰越地区の広い一軒家を借りたのは、農業資材を置くスペースが必要だから。2階に8畳3部屋と台所があり、暮らしの中心が上階になる造りだ。住み始めてもう8年になる。

「古さは全く気にならない」と話す田中さんは、築40年近い家をうまく住みこなしてきた。2階に紐をとりつけ、階下に降りずに朝刊を受け取る装置を自作したり、外付けの水栓には水受けをつけ、使いやすくしたりした。大家の小林さんは、田中さんの創意工夫を微笑ましく見守る。「今の人にはちょっと使い勝手が悪いところもあると思うんだけど、田中君はいろいろと工夫してる」

堅実な生活スタイルは、農業で体得したと話す。「農作業中に機械の調子が悪くなることはよくあるけど、その都度買い替えていたらキリがない。農家の人はみんな自分で修理している。僕も仕組みを理解して自分で何とかしようと考える癖がつきました」。

昨年3月にオープンした店の名前はトランジット。同名の旅行誌もある通り、田中さんは旅好きだ。アジア旅行や農業を通して気づかされたのは、考え方次第で自分でできることは意外に多い、ということ。最近は、素焼きのレンガで自ら家を建てたと話すタイ人に出会い、家に対する価値観を大きく揺さぶられた。そうか、〝人生最大の買い物〟なんて言われるマイホームだって、いくらでもカスタマイズできるはずと、目下「自分で家を建てる」という壮大な構想を温めているところだ。

住む人それぞれが幸せであれば

小林和夫さん◆小川町教育委員会教育長

「ここは私の生家でした」。ちょうど小林さんが立っている駐車場の辺りに店舗兼住宅があった。小林さんは昭和27年に生まれ、祖母、両親、姉、弟の6人家族の長男としてここで育った。

今では取り壊してしまった家の懐かしい情景を、小林さんは生き生きと語る。「親父が雑貨商をやってましてね。お菓子や文房具、日用雑貨、いろいろ売っていましたよ」。正月の餅つきの時、餅が手や板につかないようにふる〝餅とり粉〟や、お葬式のお返しとして弔問客に配った砂糖なども取り扱っていた。「注文が入ると『子どもたちも手伝って！』なんて親父に言われてね。手を真っ白にしながらスプーンで小袋に詰め替える作業を手伝いましたよ」。

「田中君が住んでいるのは、私が結婚する時に裏に建てた家です。店は親父が亡くなった後、お袋が細々と続けていましたが、20年ほど前にたたんで取り壊しました。裏の家はまだ新しかったので貸すことにしたんです」。小林さんは地域の付き合いをきちんとこなす田中さんの人柄を高く評価する。「彼は隣組に入って、地域とつながりを持ってくれている。単身で住んだ人では初めてじゃないかな」。

田中さんが家の外で収穫した野菜を売りながらギターを弾いているのを偶然見かけたことがある。「面白いなぁと思って。田中君はかわいいやね」。

田中さんの経営するバーへ出かけてみた時も、カラオケ代わりにギターで生伴奏をしてくれたと話す。「テンポを私に合わせてくれるからカラオケより良い。歌詞はスマホで検索して、画面を見ながら歌うんですよ。彼は大したもんです」。

〝おきょん〟と親しまれた祇園祭りに七夕祭り、小川の二大夏祭りの喧噪は、今でも記憶の中に鮮やかに蘇る。町にかつての喧噪はないが、小林さんは住む人それぞれの「幸福度」というキーワードを挙げた。「小川の良さを分かる人が住んでくれて、風土とか町の色合いを感じて幸せだと思うのなら、それが一番ではないでしょうか」。

小川保育園座談会

小川保育園の在園児・卒園児の親たちが、小川へ移住したきっかけや
日々の暮らしぶり、子育てについて、和やかに語り合った。

司会は小川高校の荻久保美咲さんが務めた。まずは小川へ移住したきっかけを語ってもらった。

保育士の高橋さんは4年前、娘の妊娠中に浦和から移住を決意。夫婦共に美大卒で、夢だった絵画教室をやってみたいと場所を探し、小川にたどり着いた。「園長先生が大学の先輩で絵画教室もやっていると知り、どうしても会いたくて」。園長先生の紹介で町内に一軒家とアトリエ二棟を借り、夢を叶える十分なスペースを得た。浦和のマンションの3分の1の値段だった。

菅野さん夫妻は昨年、アメリカから移住してきた。小高い丘に囲まれた小川は、夫のハンスさんの故郷オーストリアに似ているそうだ。夫婦で日本の地方都市を旅行するのが好きだったが、最近は地方のまち並みの衰退が気にかかり、自分たちが何か力になれないか、と思っていた。6歳の娘の将来のことも考え、帰国を決意。小川の保育園では、大きな声を出し、元気いっぱい走り回る子どもたちに目を丸くした。「アメリカだったら怒られる（笑）。ここに子どもを入れたいと思いました」

静岡で看護師をしていた松永さんは、20代前半に訪れたイギリスで、田舎暮らしの豊かさに憧れるようになり、14年前に単身移住してきた。「看護職だったのに、どうも子どもが苦手だった」と打ち明ける松永さんは、35歳になるまで「結婚や子育てなんて、考えたこともなかった」と半生を振り返る。そんな自分を180度変えたのが、小川で始めた農業だった。「日々成長する畑の苗のちっちゃな命に、愛おしさを感じるようになったんです」。その後出会いがあり、結婚。子ども授かり、小川で大きく人生の舵を切ることになった。

料理教室を主宰する岩崎さんは、練馬区から移住して12年目になる。理想の田舎暮らしを求め「5年間、何百軒も見て回った」岩崎家が運命を感じたのが、八和田地区の高見だった。80世帯ほどの集落で、親類縁者以外の家族が引っ越してきたのは26年ぶりと歓迎されたそうだ。「その場所を見た時、主人が『ここだ！』って決めたんです」。後にも先にもない彼の見事な〝野生の勘〟でした、と岩崎さんは笑う。

◇

慣れない田舎暮らしはハプニング満載、と盛り上がる。運転に自信がないのに小川は迷路のような細道や坂道が多く、冷や汗をかいたこと。隣組（※）や家屋の古さにも話は及んだ。松永さんは移住してまもない頃、行事などを協力し合う隣組のことを知らず、「隣組って何ですか？」と聞いてしまったと笑う。汲み取り式トイレや、汲み取り券を文房具店で買うことなど「初めてのことだらけで驚きました」。

高橋さんは古民家住まいの苦労を語った。「雨漏り一つも、対処に困ってしまった。ネズミが出た時は父も呼んで、大捕り物のようでした（笑）。人のように手のかかる家なので、町の先輩方の知恵を共有させてもらえたら、格段に暮らしやすくなると思う」

◇

日々ハプニングは起きるが、元気にすくすく育つ子どもたちを見ると、小川で子育てができて良かったと思う、と参加者は口をそろえる。

「娘の笑顔が増えた」と話すのは菅野さん。「都会の子が雑草だと思うような草花の名を『この前お散歩で見たホトケノザだよ』と教えてくれる。アメリーは絶対に出てこないボキャブラリー。自然の中に美しさを見出す感性が育っていることがうれしい」。

高橋さんは出産して、移住前に初めて子どもを預けた保育園は、夜まで電車の騒音がひっきりなしに響く高架下の小さな保育園だったことを引き合いに出す。「今、うちの子は裸足で外にポンっと飛び出して、足も拭かずに上がってくる（笑）。たくましく育っている。子どもが、体の機能を活発にできる環境が周囲に整っているということはやっぱり大きな財産だし、小川に来て一番良かったと思うところ。都心の人が喉から手が出るほどうらやましい環境であることは間違いない」。

大石さんは、食の充実を挙げる。「うちも有機農家だし、スーパーで売っている有機野菜も都内よりずっと安価。子どもたちに良いものを気軽に食べさせてあげられる環境がある」。

デザイン職の藤野さんは、小川には適度な規模の自然が残っているのが良いと語る。「大人が良かれと思って計画的に造る空間はつまらない。役所が〝公園〟だと決めたら、できないこともいろいろ出てくるけれど、小川の田舎には公園ではない原っぱみたいな場所がたくさん残っていて面白い。穴掘ってみたり、子どもが好きに遊べる」。

◇

両親や親族のいない土地での子育ては「ちょっと預けたい」と思った時に見てくれる人がいない。子どもが不意に体調を崩し不安が募ることもある。松永さんは育児を一人で抱え込んでつぶれそうだった時、保育園に助けられた、としみじみ話す。「子育ての悩みを話すママ友ができましたし、卒園生は家族のよう。保育園は親が参加する行事もいっぱいあって、当時は育児と生活を回すのにただ必死なんですが、後からその価値に気づかされる」。

「小川に祖父母はいないけど、周囲の人たちが身内のように温かく接してくれた」と振り返るのは、大石さん。

また、集まった6家族のうち、唯一実家が隣町にある藤野さんは、両親を頼りながらの子育てだ。田舎暮らしと言うと親や親戚のいない新天地を想定しがちだが、藤野さんは「自分の地元という田舎に暮らすのも、子育てにはすごく良いと気づいた」と話す。

◇

子どもにとって最高の環境を優先したが、親の働き口や家庭の経済事情は避けては通れないと指摘する人もいた。

菅野さんは、「なかなか正規の仕事が見つからず、起業もすぐには難しい」。ハンスさんは、「今はスローライフというより、あくせくした毎日」と笑う。アメリカでもアート活動をしていた菅野さん夫妻は、自然やまち並みが制作のインスピレーションをくれる小川で、いずれアーティストたちが集う場を作ってみたい、という夢もある。

岩崎さんは「小川では自分の生き方を発信することが仕事になる。この環境で子どもたちを信頼して育てていけば大丈夫。自分たちもやりたいことをやって、生き生き過ごして」と、皆を励ました。

終盤、小川の未来の話になると、自らも設計と竹細工の仕事を掛け持つ藤野さんは、「得意を一つに絞る必要はないと思う。3、4個得意なことがあっていいという発想で子育てしていきたい。将来の仕事も、無理に一つに限定する必要はないのでは」と柔軟な考えを示した。「経済が問題だったら、その町の経済の中で幸せの形を探していけば良いわけだし、そうやって子どもが自分の暮らしを軸に自発的に動けるように育っていけば、社会のいろんなことが変わる気もするんですよね」。例えば、畑を借りて家族分の食料が自給できれば、食費は抑えることができるし、勤め先もひとつに絞らなくても、例えば都内と地元、双方の人脈を生かしつつ、自分なりの生業の形を模索できる。田舎暮らしの方法論は考え方次第だ。

※隣組…戦中に制定された、5～10軒単位からなる地域の自治組織。現在は清掃や近所の祭り、葬儀の手伝いなどを相互で助け合っている。



【参加者】写真右手前から、岩崎信子さん（長男23歳、次男15歳）、ハンス・ナーグルさん、菅野直子さん（長女6歳）、大石美香さん（長女8歳、長男5歳）、
高橋桃子さん（長女4歳）、司会の荻久保美咲さん、松永由美さん（長女8歳）、藤野真也さん（長女4歳、長男0歳）
【協　力】小川高校放送部　2018年1月6日小川保育園乳児棟にて

小川で、
自分らしく
働く





暮らしと労働は地続きだ

ハッタケンタローさん
イベントプロデューサー＆デザイナー

里山や古い街並みを舞台に、個性豊かな
町民がつむぐ「物語」のある町

「東京朝市アースデイマーケット」「土と平和の祭典」など、有機農家と都市の人々を結ぶ農業イベントの仕掛け人兼デザイナーとして欠かせないのがこの人だ。プロデューサーとして全体を取り仕切る一方、リーフレット制作など細かなデザインワークもさくさくこなす。ハッタさんは、異色な人材だ。

現在のワークスタイルからは意外に感じるが、前職は商社の営業マンだった。効率良く仕事をこなし、営業成績は良かったが、汗を流す労働の幸福感（一杯のビールのおいしさ）は味わえなかったという。〝仕事〟と〝働く〟は全く違うと気づかされた会社員時代だった、と振り返る。

インターネットの普及で、会社に縛られる時代でもなくなったことを感じ、退職。2001年、カルチャー誌を通して、興味を寄せていた渋谷の地域通貨プロジェクトに参加後、徐々にイベント運営やデザインが本職となっていく。

小川町に移住したのは、東日本大震災が起きた2011年の12月。同町でハッタさんが企画する、麦まきから麦汁作りまでを体験するイベント「はじめる自給！　地ビールチャレンジ」で育んだ縁がきっかけとなった。現在、槻川沿いの一軒家を借り、家族と暮らす。打ち合わせで都内に出向くこともあるが、普段は日中自宅で作業をすることが多く、夕食の支度を担当することもある。

里山や古い街並みを舞台に、個性豊かな町民が糸のようにつながり合う小川町は、「暮らしそのものが物語。ジブリ映画のよう」とハッタさん。一人ひとりの思いや経験値が尊重される町のサイズ感は、そもそも暮らしと労働が地続きであったことを教えてくれるのだ。

休日は都会と距離を置いて

脇元寛之さん
株式会社 SGN 代表取締役

1時間半という都会との適度な距離が
仕事と休息のメリハリを作ってくれる

新宿・高田馬場でシステム開発会社を経営する脇元さんは、いろんな顔の持ち主だ。「趣味半分」と語るのが、Twitterに似た新しいSNS、マストドン運営者としての顔。アクセスのアクティブ度合いが国内で5本の指に入る音声合成ソフト「ボーカロイド」のコミュニティを管理し、自らもクリエーターとして参加している。

小川町とつながったのは、サイクリストとしての顔だ。ロードバイク愛好者は週末山へ走りに行くが、小川町は秩父を目指す時、仲間と落ち合うのに皆が利用する玄関口なのだそうだ。脇元さんは何度も小川町を訪れるうちに農作業にも関心が向いた。6年前に畑を借り、少し経つと駅近くにマンションを借りた。

小川町のマンションは、家賃が新宿の3分の1なのに部屋はずっと広かった。程なくして荷物も全部運び込んでしまった。遠距離の電車通勤になじむまでは、と職場近くの住まいも残しておいたが、1時間半の通勤を負担に感じることはなく、新宿のマンションは解約した。移住は自然な流れで完了した。

会社は遠くはなったが、もともとフレックス制だったし、リモートワークの社員もいた。ネットさえつながれば、自宅でも作業はでき、会議や情報共有にも不自由はしない。

通ううち、職場との間に生まれた距離感が、仕事と休日のメリハリもつけてくれたことに気づいた。「休日も都会にいると疲れがとれない、がんばらないと自然にも出合えないことがストレスになる」。ネット空間を自在に行き来する脇元さんでも、やはり休日は都会と距離を置いてこそ、新たな英気が養えるのだ。

有機農業を、あたり前のものにしたい

金子宗郎さん◆霜里農場



「たまたま有機農業と出会ったんです。人との出会いと同じですね。有機が初恋の人」と笑うのは、霜里農場の金子宗郎さん。

有機農業に携わって18年という金子さんは、フィリピンのネグロス島でNGOスタッフとして有機自給農場の立ち上げに10年以上関わったあと、霜里農場へ。小川町にきて10年ほどになる。

霜里農場は、有機農業の草分け的存在、金子美登さんの農場で、40年以上、小川町の有機農業を育て、牽引してきた。田畑3ヘクタール、山林3ヘクタールを有し、牛4頭、鶏150羽を飼育。徹底した有機農業を実践しつつ、肥料やエネルギーの自給にも取り組んでいる。落ち葉や米ぬかを堆肥に、鶏のフンや牛のフンは肥料に、というだけでなく、家畜の糞尿や食物残渣を利用したバイオガスプラントでは、ガスと液体肥料ができる。太陽光パネルは家屋やアイガモ農法の獣害防止柵、井戸揚水ポンプなどに利用。地域の廃油は、トラクターなどの農機具や車両の燃料として活用している。農場では、農薬や化学肥料に頼らないだけでなく、電気や石油などにもできるだけ頼らない、持続可能なエネルギーの循環を目指しているのだ。

「食べるものを作ることは、生きるために必要なこと。なかでも有機農業は、単に米や野菜を作るのではなく、環境を守り、地域を守り、持続可能な循環型社会を作ることでもあるんです。安全やおいしいというだけではない」と金子宗郎さんは言う。

小川町は有機農業の里として全国的に知られている。実際、総農家（販売農家）数のうち有機農家が占める割合の全国平均は約0．47％だが、小川町は約17％と群を抜く（※）。

2009年、小川町の下里では、集落の販米農家のすべてが有機農業に転換。下里集落は、事実上、日本初の有機の里になった。2010年、農林水産祭「村づくり部門」で天皇杯を受賞。2014年には天皇皇后両陛下が下里地区を視察に訪れた。また、2014年から毎年開催されている「小川オーガニックフェス」は、県内、県外から来場する多数のオーガニックファンでにぎわう。

霜里農場では、1979年から農業研修生の受け入れをスタート。これまでに130人以上を輩出し、北海道から沖縄まで、全国各地で有機農業者として就農している。小川町では霜里農場以外にも、複数の有機農家が研修生の受け入れを実施。行政による就農サポート「農業次世代人材投資資金（旧青年就農給付金）」や農家同士のネットワークも充実している。畑の指導つき貸し農園もある。小川町には、移住を機に家庭菜園をはじめたいと思っている人から、有機農家で農業研修をしてみたい人、本格的に新規就農したいという人まで、多様なサポート体制が整っているといっていいだろう。

「有機農業って特別なものじゃないんです。どこにでもある、あたり前のものにしていきたい」と語る金子宗郎さんの今後の夢は、町の自給率のアップだ。小川町の農家が集まると『自給率を上げていきたいね』という話になるという。地元の小中学校の給食では、現在も有機野菜が使われているが、学校サイドからももっと有機野菜を使いたい、という声が多いそう。将来はより多くの有機野菜が使われるようになるにちがいない。

「有機農業の営みが、地域のいろいろなものとつながってきています。有機の米や大豆、麦を使った酒や醤油、豆腐、麺などが開発され、里山保全活動も始まりました」。

山を整備することは、田畑を守り、育てることにつながる。山の豊かな養分を含んだ水が、おいしい米や野菜を育てるからだ。2018年には下里分校の一室を改修したオーガニックカフェもできた。小川町は有機農業を核として、人と人がつながる場が増加中。まさに「有機の町」なのである。

※「有機農業の地域的展開に関する実証的研究―埼玉県比企郡小川町を事例として―」（小口広太・2016）より





小川町を知るキーワード

インタビューに登場した人・物・場所や、小川町のお薦めスポット、イベントなどをキーワードでご紹介します。小川町に遊びに来るときの参考にしてください！

1. 金子美登（よしのり）
70 年代から「日本の未来に貢献する」という信念を持って小川町で有機農業に取り組んできたパイオニア的存在。循環型農業の理想形を実践しながら、地元の豆腐店や酒造とタッグを組んで加工品を生み出すなど、有機をきっかけとした地域活性にも貢献。霜里農場で 100 人を超える研修生を輩出するなど「有機農業の小川町」の流れを生み出す、その源流となった人物。

2. 自然派の地ビール＆地ワイン
『畑からのビール造り』をモットーに自給自足 100%ビールに挑戦する「麦雑穀工房 マイクロブルワリー」は、遠方から訪れる人も多い人気店。完全無農薬のぶどうを使った自然派ワインが魅力の「武蔵ワイナリー」では、全国から選りすぐりのこだわりワインが飲める「小川のワイン祭」を毎年４月の G.W. 前半に開催するなど、小川町では日本酒以外にもお酒の楽しみ方がいっぱいです。

3. はじめる自給！　地ビールチャレンジ
ビールの原料となる有機大麦を自分たちの手で蒔いて、育てて、収穫するまでを体験できるイベント。「ビールが好き！」という思いで集まったさまざまな人たちが、国産自給率 100%を目指すビールづくりを通して交流しています。

4. Ogawa Organic Fes (小川町オーガニックフェス)
有機の里・小川町で催されている、食はもちろん、トークイベントやワークショップを通して、五感でオーガニックを感じることができる野外フェスです。MINMI、Yae などのアーティストによるアコースティックライブもあり、緑に囲まれた山の中の会場には昨年 6000 人以上の人が集まる盛況ぶりでした。

5.NPO法人 霜里学校（しもざと）
赤い屋根が可愛らしい旧下里分校の校舎を利用した、地域の内外の人たちの交流拠点。初心者から有機農業の技と思いを学べる「有機野菜塾」、お花見や出店で賑わう「さくら祭り」、耕作放棄地を活用したお米作り体験「マイ米田んぼ」などのイベントが毎年行われています。

6. 山に囲まれた町
なだらかな低山に囲まれた小川町では、日常の暮らしが山とともにあります。一部の保育園のお散歩コースにも登山が組み込まれることもあり、子供たちも自然と山歩きを覚えて、強い身体を育てていきます。「ちょっとそこまで」の気分で登山ができるのも、小川暮らしならではの楽しみ。

7. サイクリスト
周囲の山々のおかげで適度なアップダウンがあり、豊かな自然が目を楽しませてくれるとあって、小川町を含む比企地域は関東屈指の人気サイクリングコースがたくさんあります。かつては自転車の国体のコースにもなったほどで、バイクラックなどの設備面も充実。サイクリストじゃなくても、レンタル自転車でサイクリングが楽しめます。

8. 外秩父七峰縦走（ななみね）ハイキング大会
毎年春に行われる、東武鉄道主催のハイキング大会。山々に囲まれた地形だからこそできる長距離縦走を楽しみに、多くの老若男女が小川町を訪れます。

9. 小川和紙マラソン
2017 年で 25 年目を迎えた、小川町を一周するマラソン大会。街並みと自然を楽しみに毎年約 4500 人が参加。多彩な地元グルメが出店されているのも魅力です。

10. 小川町七夕まつり
7 月末の土日に開催される七夕まつりに集う人々の数は、約 20 万人。この 2 日間は、小川町に最も人が集まる日でもあります。約 1800 発が打ち上げられる花火や、小川和紙をふんだんに使った竹飾り、行燈などが町を彩ります。京都にならって開催されていた祇園祭（愛称はおぎょん）と 1970 年に統合されたこともあり、屋台の引きまわしなどの伝統的な出し物も。

11. 花和楽（かわら）の湯
手ぶらで日帰り温泉も、ゆったり宿泊もできる温泉施設。きれいで広々とした館内には露天風呂、岩盤浴、サウナ、足湯と充実の設備が。お食事処では地元産の食材を使った料理や、地酒が味わえます。

12. 太田ホルモン
小川町駅近で比企地域のソウルフードである「やきとり」（豚肉のカシラ肉を焼いたもの）が食べられる、創業 50 年以上の老舗ホルモン店。名物の辛味噌ダレの味わいは、お酒がすすむこと間違いなし。

13. 自治の気概
かつては商人の町として栄えた小川町には、自らの手で物事を変化させていく「自治の気概」があります。個人商店から日本を代表する一部上場企業へと成長した「しまむら」「ヤオコー」も、この小川町の気風から生まれました。

14. コミュニティスペース「たまりんど」
NPO 法人小川町創り文化プロジェクト（まちぶん）の拠点でもあるギャラリー＆カフェ。明治時代に建てられた長屋を活用した落ち着いた店内には、ゆったりとした時間が流れます。地元の工房産の焼き物などの素朴な工芸品、どこか土の香りがするアート作品を眺めながらのカフェタイムに、思わず時間を忘れてしまいそう。ワークショップなど貸しスペースとしても利用可能。

15. 和紙体験学習センター
1936 年に建てられた和紙の埼玉県製紙試験場。趣のある昭和レトロモダンな建築が楽しめるとともに、製紙に使われていた機械が間近で見られるのも魅力です。現在は手漉き体験のほか、和紙の作品展示も行っています。

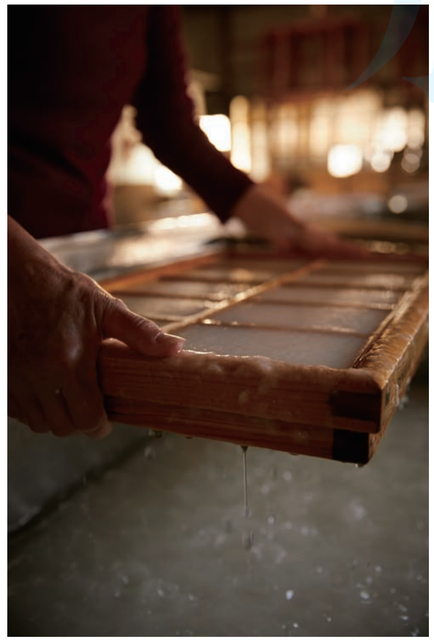
小川町に関するお問い合わせ

小川町の観光情報や移住情報などを知りたい方は以下までお気軽にアクセスしてください。

□小川町役場

□小川町観光協会

□小川町移住サポートセンター



【和紙漉き体験のお問合せ】
埼玉県小川町役場 にぎわい創出課
電話：0493-72-1221（内線 233）
ファクス：0493-74-2920

小川和紙

小川町の中心部を流れる槻川は、住む人、訪れる人の憩いの場となっています。この豊かな水が小川町といえば「和紙」といわれる紙漉きを育てました。何よりも豊富な水は楮（こうぞ）の加工から紙漉きまで、和紙作りには欠かすことができないものだったのです。

およそ１３００年前に紙漉き技術が伝えられると、和紙作りに適した土地であったこと、江戸の町へも近いという地理的条件のために小川和紙は地場産業として大きく発展しました。江戸時代は７５０戸、大正期には１０００戸にも及ぶ農家が紙漉きに従事し、庶民の生活必需品となった和紙の需要に応えてきました。戦後の高度経済成長によって和紙の需要は減少しましたが、現在は伝統産業として小川和紙を守る職人が活躍し、町をあげて後継者の育成にも力を入れています。

小川の和紙の中でも、国産楮のみを使った細川紙は、強靭で美しい光沢を持つ上質な和紙です。昔ながらの手作業で、熟練の職人によって「流し漉き」で作られ続けている細川紙の技術が、２０１４（平成26）年にユネスコ無形文化遺産に登録されました。

素朴な手触りの細川紙は、丈夫で保存性も高く、実に１０００年以上の使用に耐えるといわれています。書道用の半紙や版画紙、障子紙や掛軸の裏紙はもちろん、和傘、ちょうちん、紙の器などの生活用品にまで幅広く使われています。

細川紙は薬品による漂白を行わないため、できあがりは自然な楮の色合いですが、普通の和紙が光にさらされることで、だんだんと黄ばんでしまうのとは逆に時間が経つにつれて白さを増していくのも魅力です。

秩父の山々でろ過された地下水。
これを源流に持つ槻川、兜川といった清流が、
小川の伝統産業を支えています。

【酒蔵見学などについてのお問合せ】
晴雲酒造　　TEL 0493-72-0055
松岡醸造　　TEL 0493-72-1234
武蔵鶴酒造　TEL 0493-72-1634



小川地酒

同じく秩父山系の清流が造り出した名産が「地酒」。美しい水、酒造りに適した気候の小川には、多くの造り酒屋が存在しました。その隆盛は神戸の酒どころ「灘」になぞらえ、「関東灘」の別名で呼ばれるほど。それほどまでに酒造りが盛んだった理由のもうひとつには、商人の町として多くの人が訪れていたことが挙げられます。和紙産業を中心に栄え、多くの人が行きかうようになると飲食産業の需要も高まっていきます。今も残る料亭や旅館の立派な店構えに、往時の繁栄をしのぶことができるはず。酒造りは中でも特に人気で現在も町には３軒の造り酒屋があり、伝統の酒造りを行っています。

芳醇な味わいの酒が特徴で１８１９（文政２）年ともっとも歴史の長い「武蔵鶴酒蔵」、米や和紙などの地産地消にも力を入れている「晴雲酒蔵」、全国的にも高い評価を得る「帝松」に代表される「松岡醸造」。それぞれの酒蔵が腕を競い合い、特色のある銘酒を生み出しています。

「道の駅おがわまち」など、小川町内のさまざまな店舗で各酒蔵の日本酒を購入することもできますが、お酒好きなら各酒蔵をめぐってみるのもおすすめ。

各酒蔵に残る白壁の蔵や煉瓦の煙突など、「武蔵の小京都」らしい歴史のある佇まいを楽しめると同時に、酒蔵に併設されているショップでは、お酒以外にも酒粕やスイーツ、漬物などのオリジナル商品が購入できます。ぜひ足を運んでお気に入りを見つけてみてください。

さらに深く酒造りを知りたい人のために、各酒蔵では見学（要予約）も行っています。

■小川町のこと

埼玉県のほぼ中央部に位置する小川町。「絹の道」と呼ばれた八王子道や秩父往還などの街道が交わり、人も物も集まる宿場町として栄えました。槻川の清流に支えられた和紙づくりや酒造、そして建具や鬼瓦、裏絹などの産業によって発展し、現在では有機農業の取り組みでも広く知られています。また地域のクラフトビールや、地元産のぶどうを使ったワイン、そしてモノだけではなく、「これからの豊かな暮らし」を考える人々が小川町には少しずつ、でも確実に増えてきているのです。緑豊かな里山に囲まれた土地であると同時に、新しいものを生み出す力を秘めた場所を、ぜひ訪れてみてください。

「山の町、紙の町、酒の町」である小川町は、地盤が固いために地震の際に揺れにくく、液状化が起きにくいのも特徴です。1955（昭和30）年に小川町・大河村・竹沢村・八和田村が合併し、翌年大里郡寄居町の西古里地区と鷹巣地区のそれぞれ一部が加わって、現在の小川町となりました。現在は小川地区、大河地区、竹沢地区、八和田地区と4つの地域に分かれており、それぞれの地域に風土や歴史による特徴があります。

■小川地区

中心市街地を形成する「小川町駅」前は、江戸時代に作られた街です。国道254号はかつて六斎市（室町～江戸時代に開かれた定期市）が立ち、隆盛を極めました。和紙などの伝統産業を支えた槻川の流れはまさに小川町の象徴。南東部にある下里エリアは、世界的にも有名な「有機農業」の里になっています。

■大河地区

南西にあたる笠山から豊かな森林が配され、林業がとても発達した地域です。北東方向に派生する平地部分には小川の伝統産業を支えた木工所が数多くあります。川沿いに造り酒屋も1軒あり、総合福祉センターや栃本親水公園があるなど、癒しの空間が広がっています。

■竹沢地区

東武東上線の「東武竹沢駅」とJR八高線の「竹沢駅」の2駅を配する竹沢地区は、官ノ倉山や石尊山などでハイキングが楽しめます。発達した谷津田（谷地にある田んぼ）に集落があったり、国の指定重要文化財・吉田家住宅がある一方、ホンダのエンジン工場があるなど、バラエティに富んだ地域です。

■八和田地区

田園が広がる八和田地区は、農地が占める面積が多く、集落と里山の自然とが共生しています。旧鎌倉街道が地域の市ノ川沿いに走り、宿場として栄えた奈良梨や四津山城跡など中世の面影が残る、小川町でも最も古くに栄えた地域です。関越自動車道の「嵐山小川IC」もあり、車でのアクセスが便利です。



■データ

［面　積］60.36㎢（うち林野面積33.07km²）
［人　口］30,532人
［世帯数］12,986世帯
（平成30年2月28日現在）

■アクセス

［電　車］池袋駅から東武東上線急行で小川町駅まで約1時間10分
［　車　］関越自動車道　嵐山・小川IC下りる

小川町移住サポートセンターは顔が見える関係を大切にしていきたいと考えています。
ぜひ窓口へお越しいただき、ご希望などお聞かせください。

■小川町移住サポートセンター（運営：NPO法人霜里学校）
TEL 0493-74-1515（観光案内所「楽市おがわ」共通）
e-mail info@ogawa-iju.jp
〒355-0328 埼玉県比企郡小川町大字大塚47番地3　2階
開館時間 火～日 9:30～17:00　定休日＝月
HP http://ogawa-iju.jp
Facebook https://www.facebook.com/ogawa.iju/

■協賛
移住サポートセンターの取り組みにご賛同いただき、
以下の個人・企業の皆さまにご協賛いただきました。

川野 幸夫　株式会社CWM 総合経営研究所　株式会社大塚紙店　株式会社ネクサス
尾島 満矢　一般社団法人 the Organic　長倉 正昭　株式会社ミララ　役場のとなりのバル。
正喜バル　武蔵鶴酒造株式会社　門倉和紙店　伊藤 貴久　有限会社クリナス
有限会社大塚商会　松岡醸造株式会社　五十嵐 康博　晴雲酒造株式会社
サラダ館小川町駅前店　安藤 和広　八田 さと子　田中 栄子　谷口 西欧
小原 壮太郎　大和田 順子　髙橋 美江　平山 友子　長谷川 欣則　西田 双太
株式会社佐山商店　水谷 伸二　矢ヶ部 慎一　江田 佳那子　Ogawa Unity

■取材協力
本冊子制作にあたって企画段階から取材まで、
以下の学校・個人・団体の皆さまにご協力いただきました。

小川高校放送部
谷野 浩人（顧問）　荻久保 美咲　野口 理美　安達 湖瑠　加賀谷 百世
安藤 真穂　小村 真衣　水野 香織　久保田 真央　清水 結生
長田 夢花　斉藤 あい　松本 哲平　坂本 健登　服部 涼平

小川保育園　川越観光自動車株式会社
武蔵鶴酒造株式会社　和紙工房うちむら
高橋 優子（NPO法人生活工房つばさ・游）
平山 友子（たまりんど）　毛利 公昭

■営業協力
立教大学コミュニティ福祉学部 コミュニティ政策学科
空閑 厚樹（教授）　鎗田 裕理奈　津田 萌香　中村 理恵
岡田 梨花　高橋 蓉子

■ STAFF
Producer　谷口 西欧
Editor　田尻 彩子
Writer　岩井 光子
Writer　小沢 映子
Copywriter　蓑田 雅之
Art Director　三村 漢（niwa no niwa）
Photographer　公文 健太郎

■発行
小川町移住サポートセンター（平成30年3月発行）

■印刷所
株式会社東京印書館

■小川町移住サポートセンター
安藤 和広
八田 さと子
田中 栄子
谷口 西欧